

再生現場を空間計画の立場から確認して (Montbéliard-Bethoncourt)

MAY 2012
VOL. 062

文部科学省 私立大学 戦略的研究基盤形成支援事業
『集合住宅“団地”の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究』

■再生前の状況

ベトンクールは、フランス東部のモンペリヤールからバスで20～30分の町。このベトンクールHLM団地（1950年にフランスで制度化された公的補助による低家賃住宅）は、1970年にプジョーの社宅として建設されたが、リストラによる社員の大量解雇によりスラム化した。1990年、建築家ルシアン・クロール（Lucien Kroll）が再生プランを作成した団地である。計画の舞台となったシャンバロン地区は、大地の縁にあり、古い村落を見下ろしている。ほとんど人気がないほど荒廃し、貧困化が進み、新住人からも敬遠されており、事業主はスクラップ&ビルドでの建て替えを考えていた。

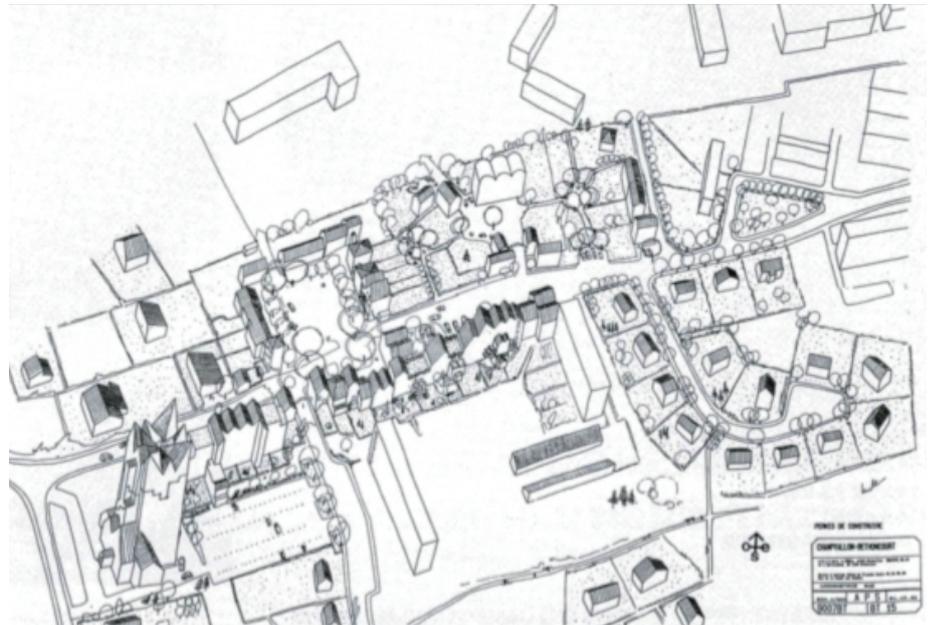


図1. 再生計画（一次） SD 8805 第 284 号 ルシアン・クロール 鹿島出版会（1988.5.1）

■再生の手法

しかし、L・クロールは、既存の建物を利用して再構成し、そこに親しみやすい集住体のイメージを生む提案を行った。四角く堅苦しい既存の住棟の角に刻みを入れてギザギザにし、その境界を複雑なものにし、一方、10年来放置されていた40戸の既存住棟を再生して連続させ、それによって多様性を備えた新たな都市空間を生み出すという計画である。（図1,2）



図2. 既存住棟の一部を減築し、増築する



図3. 現在の状況（Google Earthより）

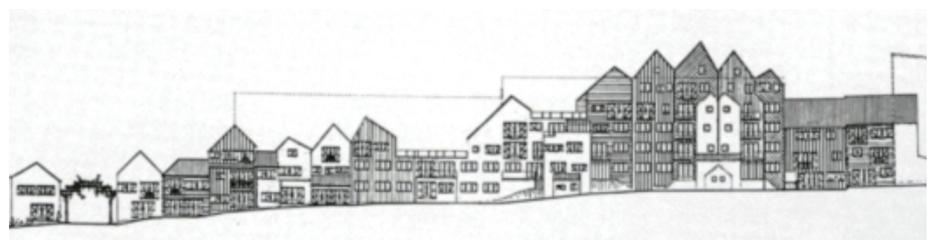
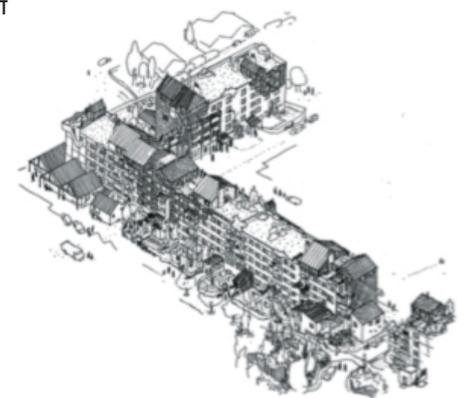


図4. 四角い既存住棟を親しみやすく更新

コストは一般の市営住宅と同じコスト。修復部分のコストが安いので、このようなカタチが実現できている。

図5（右下）. ルシアン・クロールによる、標準型団地住棟の再生イメージ（ペルシーニュ団地、アロンソン、F）



■再生後の姿

すでに知っていた配置図（図1）から、実際には南西の既存住棟が連続テラスハウスに建て替わっていた。（図3）

■再生の現場を確認して

○新築と既存住棟の修復を混在させ、地域に新しい環境と、歴史や風土の継続性を再生するという新しい発想の素晴らしい実例。この町ののんび

りとした風土感に、実にフィットする好ましい形態、空間である。

- 周辺には、低層の独立住宅と古い団地型住棟が混在しており、それらの合間に垣間見える風景は、その混在の様子が非常に好ましい。
- 写真だけでは、その感じが理解できないかもしれないが、素材、色彩、ディテール、どれをとっても、この場所を意識した解決。既存住棟の視覚的变化を伴う大胆な改造、少しの修復、それらを新たにつなぐ増築、「小さく解く」「混ぜて解く」(by 江川)の一つの好ましい実例。
- 実現までのプロセスには、外構などの工事も含め、住民の参加が組み込まれているようで、人々の適度な愛着感が感じ取れる。
- 図5の提案も含め、我が国の中層5階建て住棟の繰り返しによる団地の再構成には、そのスケール感が大いに参考になる。



図 6. 親しみやすい形の改造住棟と修復住棟



図 7. 坂上からの北側道路沿いの景観



図 8. 坂下からの北側道路沿いの景観



図 9. 道を挿んだテラスハウス



図 10. 西から見た風景



図 11. 丘の上の改造住棟部分



図 12. 周辺に残る団地型住棟



図 13. 西側の建て替わったテラスハウス



図 14. 周辺から垣間見る複合景観

参考資料： BIO-CITY 1996 Winter no.7 株式会社 ビオシティ

『再生現場を空間計画の立場から確認して (Montbeliard-Bethoncourt)』

発行：2012年5月

調査：江川直樹(関西大学 教授)
レクチャー：江川直樹()
執筆：江川直樹()

(調査：2012年3月2日)
(講演：2012年5月8日)

本リーフレットは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「集合住宅“団地”の再編(再生・更新)手法に関する技術開発研究(平成23年度～平成27年度)」によって作成された。

関西大学

先端科学技術推進機構 地域再生センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

先端科学技術推進機 4F 団地再編プロジェクト室

Tel : 06-6368-1111 (内線 : 6720)

URL : <http://ksdp.jimdo.com/>